



『〈ブラッシュアップ助産学〉

助産外来の健診技術

根拠にもとづく診察とセルフケア指導』

評者・長坂 桂子 NTT 東関東病院

全国調査によると、助産外来は405施設、院内助産は59施設で開設されており、年々増加傾向にある(2010年度、厚生労働省医政局看護課調べ)。これからの産科医療の場で医師と助産師の役割分担と協働はますます重要になり、助産技術のブラッシュアップは欠かせない。

本書は、助産師が妊婦健診を担当する際に必要な健診技術・情報の査定・ケア方法のエッセンスをわかりやすくまとめたものである。構成は、ハイリスク妊婦の把握と対応、外来でのアセスメント、身体づくりの3部からなり、ハイリスク妊婦抽出のためのチェックリスト、検査データの査定・説明から、妊娠中の食事や運動などセルフケアに至るまで、助産師が行なう妊婦健診に必要な項目が網羅されている。

著者は聖路加産科クリニック所長である進純郎医師と、高木愛子助産師である。お2人は、助産雑誌の連載(63巻4号～64巻3号)「スキルアップのための症例検討―問題発生時に助産師はどう対応するか」の中で、医師役と助産師役となり、臨場感あふれる問答形式の事例検討を展開された名コンビであり、私もファンの1人である。

本書には、助産外来で最も重要な正常・異常の査定に関して、生理学、解剖学、病理学といった学問的裏付けやエビデンスに基づく数値を

助産外来の知識の整理 や研鑽に役立つ1冊



進 純郎・高木 愛子 著
定価 3150 円(本体 3000 円+税 5%)
B5 判/医学書院/2010 年

用いて説明されており、読み進めるうちにポイントが絞られてくる。助産外来で遭遇する判断に迷うような状況について(たとえば、血圧が正常高値の時の対応や、子宮収縮の自覚と切迫早産の予知など)も洗練して解説されており、ケア方法や医師への異常の報告の根拠が明確になる。読み終わると単に知識が身につくだけではなく、産婦人科医師である著者から全国の助産師への期待とエールを感じるに違いない。

大変読みやすいことも本書の特徴である。豊富な臨床データや語りかけるような文章表現に、読者はまるでその場で講義

を聞いているかのように引き込まれるであろう。本書の対象は幅広い。助産外来開設準備中の方や助産外来担当者はもちろん、助産外来の開設予定はなくとも妊婦の健康相談を行なっている方にとっても、知識の整理やさらなる研鑽のために即役立つと思う。施設における助産外来担当者の研修の資料としてもそのまま活用でき、必須図書の1冊として薦めたい。さらに助産学生が、妊娠期からの継続受け持ち実習を行なう際の参考文献としても有用であろう。

私が所属する施設で2007年に助産外来を開設した際には、助産外来での診断技術について医師と助産師が共著であらわしたこのようなテキストは見当たらなかった。もし当時本書があれば大いに役立ったに違いない。